

1790年代後半のF・シュレーゲルにおける「コモン・センス」の批判

18世紀末から19世紀初頭のドイツで活躍した思想家フリードリヒ・シュレーゲル（1772-1829）は、特に初期ロマン主義の理論的代表者として知られている。彼の思想はもっぱら文学の領域において研究されてきたが、近年ではこれを当時の哲学的文脈の中で捉え直そうという試みが、ドイツはもとより英語圏においても進んできている。こうしたシュレーゲルの思想の哲学的再検討という観点から、特に1790年代後半における彼の辛辣な「コモン・センス」批判の内実と根拠を読み解くことが、本発表の目的である。

トマス・リードを始めとしたスコットランド哲学において重要な意味を獲得した「コモン・センス」の概念は、哲学書の翻訳を通じて18世紀のドイツ哲学界にもまた多大な影響を及ぼした。ドイツ語では「健全な人間知性（gesunder Menschenverstand）」あるいは「共通の知性（gemeiner Verstand）」などと訳されたこの概念は、一方ではカント哲学そのものの成り立ちにも大きな影響を与えた、とされる。しかし他方では、これらの語は後期啓蒙の流れに属する「通俗哲学」の旗印としてさかんに唱えられ、一部ではカント流の批判哲学をあまりに難解かつ思弁的であるとして批判する根拠ともなった。シュレーゲルが「健全な人間知性」や「共通の知性」に対して厳しく反対の立場を取ったことは先行研究で指摘されている通りである。しかし、この事実が上述したような当時の文脈の中でどのように位置づけられるのかについては、いまだ詳細な検討がなされていないのが現状である。

1790年代後半のシュレーゲルの思想は、一方では断章形式による著述の難解さをもって、しかし他方では「新しい神話」の構想および伝達への志向をもって知られる。一見相矛盾するかに思われるこのような二つの傾向は、シュレーゲルにおいてどのような形で共存し得たのか。この問いを念頭に置きつつ、広く一般に伝達可能な公教的哲学を目指す「通俗哲学」の旗印としての「コモン・センス」に対するシュレーゲルの態度に注目することで、ひいては「ロマン主義」と「啓蒙」の関係にも新たな光を当てることができるのではないか。こうした点に、シュレーゲルの「コモン・センス」批判の重要性がある。

そこで本発表ではまず、シュレーゲルの「コモン・センス」批判の矛先が、「通俗哲学」のみならず「批判哲学」を自任する哲学者達にも向けられていたことを指摘しつつ、その内実を明らかにすることを試みる。その上で、シュレーゲルが「コモン・センス」を「有限なもの」との関係において否定していることから、その根拠を検討する。そして最後に、「健全な人間知性」あるいは「共通の知性」を否定するシュレーゲルが、それでもやはりある種の「健全さ」および「共通性」を目指している点に注目し、彼の目指すものが「コモン・センス」概念とはいかなる関係にあるのかを考察する。